

第68回

会社訪問

熊谷理機工業株式会社

会社プロフィール

代表者：代表取締役社長 熊谷 健

所在地：〒176-0012 東京都練馬区豊玉北3-2-4

TEL：03-3994-0111 FAX：03-3994-0520

設立：1927年1月（熊谷製作所創立）

資本金：9000万円

従業員：30名

事業内容：紙・紙板試験機、塗工・印刷・加工試験機、パルプ・チップ試験機的设计・製造・販売

URL：<http://www.krk-kumagai.co.jp/>

熊谷理機工業（株） 代表取締役社長 熊谷 健氏へのインタビュー

聞き手：若井田健文（広報委員） 森尾〇〇（事務局参事）

（編集協力：クリエイティブ・レイ株）

“紙パルプ” 産業の関連機器に特化し 独自技術によって国内外で高い信用を築く

— 御社の創業は昭和2年ということですが、分かっている範囲で創業当時の様子や御社の歩みなどお教えいただけますか。

当社を創業したのは私の祖父、熊谷七次郎です。父から聞いているところでは、祖父は福島で生まれ、上京後、島津製作所の関連会社で丁稚奉公をしたあと、昭和2年に神田佐久間町で油試験機を製造する熊谷製作所を創業しました。

油試験機は油の引火点や粘度などをテストする機械で、そのころは軍需産業が盛んになっており、油試験機の引き合いは多かったそうです。昭和16年に現在地の練馬に桜台工場を建設。昭和19年には熊谷理機工業株式会社となりました。戦争中に神田の工場が焼け、建て替えるなら広い場所がよいと桜台工場の



創業者 熊谷七次郎 氏

拡充を図ります。

戦争が終わって、昭和24年に祖父は他界するのですが、これからは製紙産業が良いということをお願いしていたそうです。祖父から会社を受け継いだ父、熊谷宏は、戦後の混乱の中、一から会社をやり直そうと紙の試験機を作り始めました。

紙パルプ産業へ事業転換したのちの動きとしては、昭和44年に近代的な製造設備への移行を目指して工場を新設。昭和47年には本社ビルを建設し、設計部



昭和〇〇年代の工場風景

門を拡充、昭和58年には商品展示を兼ねた実験棟を作っています。こうして現在に至るまで60年以上にわたって、紙パルプ産業とともに事業を展開してきました。

— 御社のホームページには製品として「紙・板試験機」「塗工・印刷・加工試験機」「パルプ・チップ試験機」という項目がありますが、主な事業内容をお教えいただけますか。

当社の事業の1つは、引張試験機、平滑度試験機、こわさ試験機など、紙特有の試験機器の製造です。紙の引張試験機とは、例えば、新聞紙を高速回転機で回すときテンションがかかりますが、そこで紙にどれくらいの強度があるかを測るものです。平滑度試験機は、紙の表面の滑らかさを測る機器です。平滑性は印刷に大きな影響を与える要素で、高品位印刷には高い平滑性が求められます。

そのほかは特殊な機械になりますが、インクの滲みを抑えるサイズプレス、紙幣等の印刷性を試験するグラビア印刷試験機、パルプをより適した状態に加工するレファイナーなどの製品を独自に開発したり、実験室サイズのパルプの製造装置、抄紙機、紙の加工機などを製造してきました。

— 御社の製品はどのようなところで使われているのでしょうか。

初めのころは、製紙メーカーの研究所やその工場の品質管理部門が主でした。やがて製紙産業が大きくなるにしたがい、製紙メーカーに薬品を納入する化学会社などでも紙の研究が始まり、そこに納めることも多くなりました。

大きな製紙会社では木材を高温高压の下で蒸解するケミカルパルプが多くなり、化学薬品を多く使うようになったためです。ケミカルパルプは製造の効率も良く、繊維の長いパルプを取り出せます。またチップを蒸しプレスをかけて造るメカニカルパルプの方法では、繊維は短くなりますが、繊維間の摩擦により毛羽立ちが大きくなり、繊維のからみ合いができ、引き裂きに対する強度が得られます。紙の中

の繊維が長いということは、紙の引張り強度が得られるという利点があります。また繊維同士がからみ合うことで引裂き強度が上がります。紙はこの組み合わせでできています。この双方を両立させる研究に当社の製品が使われています。

— 御社には非常に多くの製品がありますね。

製紙技術は戦後からずっと伸びてきました。私たちが注文を受けて作った機械を納入すると、その製紙会社ではまた次の課題に直面しているという感じでした。そこで「こういう試験をする機械はできないか」と話をいただき、また新しい機械を作る。その繰り返しの中で、当社の製品も多くなっていったのです。

— ところで、紙の試験機を作っている同業他社というのは多いものなのでしょうか。

紙パルプに特化して試験機を作っているのは、日本では当社だけだと思います。また、ありがたいことに、日本の製紙メーカーが海外の工場に技術提供をするときなど、日本の技術者が当社の製品が良いと導入していただき、海外への輸出も伸びました。アジアが中心となりますが、台湾、韓国、インドネシア、タイ、最近では中国への輸出も多くなっています。

— これまでの経営者としてのお仕事の中で印象に残っていることがあれば、お聞かせいただけますか。

代表になったのは平成17年で、まだ経験は浅いの



チップを短時間でスチーミングし、加圧下でレファニングする装置
「新型 KRK 加圧レファイナー」の試験テスト中

ですが、昭和62年の入社以来のことを含めると、海外でのいくつかの経験が強く印象に残っています。

海外に機械を納品し、ユーザーの教育をすることもあるのですが、東南アジアなどは環境や状況も大きく違い、客先で思わぬトラブルが発生することがあります。そんなトラブルに対し、手持ちの数少ない道具を使い、社員が知恵を出し、問題を解決したという場に立ち会いました。ここでなんとか頑張らなければならないという社員の情熱と努力に感激するとともに、社員みんなの成長をたいへん心強く思いました。

— 逆に、厳しいと感じられた出来事などはございますか。

バブル後の長引くデフレも厳しいと言えませんが、2代目である父の話では、1970年代のオイルショックのころは製紙産業の打撃も大きく、苦労が多かったと聞いています。当時は、工場を新設し、設備も入れ替えていましたから、経営はたいへん厳しかったと思います。しかし、こんなことで日本の発展は止まらないと信念を持って耐え抜き、その後の日本の経済成長とともに会社も大きく発展することができたということです。

— 現在の課題や今後の事業目標などをお聞かせいただけますか。

紙づくりの技術は、新素材の開発により、異業種分野でも利用されるようになってきました。当社はこれまで紙の分野に特化した製品づくりに取り組んできましたが、新技術に対応した製品開発にも目を向け、私たちの発想を積極的にピーアールしていきたいと思っています。

例えば、航空機にも使われている炭素繊維を一枚の板にするには、上から粉のように降らせて、堆積させたものをプレスして作る(乾式製造法)か、水の中に分散させ、その水を抜いて薄い板状のものを作る(湿式製造法)という方法があります。ここには紙の技術が使われているのです。そのほかでも、バイオエタノールを作る手法の1つとして、廃材など

木質材料を使うときなど、チップの加工機を使います。紙で培ってきた私たちの技術や製品は、そうした新しい分野でも生きてくと確信しています。

また、これまで当社の製品は産業用として利用され、多くの人たちが使う一般品とは区別されたものでした。しかし、今は産業用の現場でも誰が使用しても安心、安全で、さらに高機能が求められる時代になってきました。この視点に立って、既存品の見直しや新製品の開発を行かなければならないと思っています。

— ペーパーレスといった言葉が使われ、紙を巡る環境も変化しているかと思いますが、今後、紙の需要はどうなるのか、どう見ておられるのでしょうか。

新聞や雑誌など印刷用紙の一部は電子ブックなどに代わっていくと思いますが、産業界から見ると、機能紙といわれる特殊な紙を作ることに、日本のメーカーは向かうのではないかと思います。例えば、建材に使われる吸湿性の機能を持った紙や燃料電池に使用されるセパレーターなど、紙にはさまざまな可能性があると考えています。

— 御社の経営理念を教えてください。

先代のころより「一に誠実、二に努力」という方針を掲げていますが、仕事に対して真摯に向き合い、研鑽を積み重ねることを基本としています。

社員一人ひとりが、製品への愛情や仕事への誇りを持ち、仕事に対してより積極的になり、その人生に自信を持ってもらえるような職場づくりを目指しています。当社は設計、製造、販売と一貫した事業を行っているので、社員も自分たちの製品がどのような場所で、どのように使われているのかが分かり、自分の仕事がこう役立っているのだと理解できるところが良い点だと思っています。また、製品や仕事に対する愛情や誇りにつながるようにと、ユーザーが製品に対して感じていることを設計や製造にきちんと伝えるようにしています。

— 熊谷社長ご自身が座右の銘やモットーとされ



経験と技術は会社の財産であるという考えから、定年後の方々を再雇用している「新世紀産業株式会社」



ていることはございますか。

石の上にも3年というように、何事にも忍耐と継続が必要だと思っています。会社も社会に評価されるためには主体的に継続していくことが大切です。続けるには、それを好きになること、日々感謝の気持ちを持つことが大切だと思います。

一品一様となる受注生産が中心となる当社では、社員が一人前になるには15～20年がかかります。ですので、社員には長く勤め、技術を磨き、人として成長してくれることを期待しています。なお、当社は60歳で退職した技術社員を再雇用しており、互いに良い形で関係を続けていきたいと思っています。

——熊谷社長は感謝という言葉をよく使われるようですが。

中村天風という方がおり、その講演や語録などをまとめた本をよく読むのですが、そこには感謝の気持ちこそが大切だと教えています。時には苛立ちや怒り、憎しみといった感情を心に抱くことがありますが、そのような感情を永く留め置くことは心を消極にすることである。生かされていることに感謝し、常に前向きに人生を創造することが、こころの心底から積極にすることになる。この心底に働きかけることが意義ある人生を創造する源になる。何故なら心底は宇宙とつながるところであり、それが宇宙の真理である。

この本の魅力は、読むと元気な気持ちになれることです。しかし、しばらくすると日常の煩雑さに追われ、その気持ちを忘れるので、また本に目を通し、改めます。そういうふうにも何度も読み返しています。

——最後に協会に対して一言、お願いいたします。

協会の会員にはメーカーや商社があり、新年会や総会などで皆さんとお会いできるのは、私にとってとても有意義な機会です。こういう交流の場を大切にしていきたいと思っています。協会の行事にはあまりお手伝いができておりませんが、各事業の企画運営に先頭に立って力を尽くしておられる理事の方々やその補佐をされている各委員の方々、そして協会の職員の皆さんにはたいへん感謝しております。

——乗馬の楽しさに生きていることの喜びを実感

前々回の10月号で富山科学工業(株)の富山さんも趣味とされていましたが、私も3年前から乗馬を始めました。馬は不思議と乗っている人の気持ちが分かるようで、可愛くもあり、また侮れないところもあります。夏場などは馬も人と同様に汗をかきます。運動後に馬の全身を水洗いしブラッシングすると、馬は気持ち良さそうにしています。馬もそんなことを良く覚えているようで、なついてくる馬もおり、こちらにも親近感を覚えます。しかし、馬はこちらの指示通りに動かないこともあります。そんな馬をいかに思い通りに動かすか、馬との駆け引きが乗馬の面白さの1つです。まだまだ指示に従わないことも多々ありますが、それでも馬に対する感謝の気持ちが湧いてきます。馬に乗って汗をかき、運動した爽快感、疲労感を感じることは、生きていることを実感するような喜びでもあります。